事故同型機の飛行再開に強く抗議する

あの忌まわしい米軍ヘリ墜落事故からちょうど２カ月、いまもあの日のことを想起して、恐怖感にとらわれる教職員や学生は多い。今日もあの時間に現場では抗議の集会が開かれる。

本学は、事故以来、緊急の対策本部を設置して懸命な事務・教学機能の回復に努め、十分な安全確認とその旨の学生・教職員への伝達・徹底を行い、９月２７日のオリエンテーションから後期教学業務を再開し、現在に至るまで幸い大した矛盾もなく、講義はすすんでいる。あの事故以来、米軍の当然ながらのヘリの飛行停止によって静かな日々を送っている。ヘリの日常的飛行が「当たり前」で「正常」な状況とされてきた私たちにとって、ヘリが飛ばないという「異常」が安心・安全な生活が戻っているという、この異常さを、我々はどう考えればいいのであろうか。

しかるに、わずか２カ月のつかの間の静寂が、またも無残にも引き裂かれようとしている。去る１０月８日の米軍による事故原因の公表、昨１２日の町村外相の飛行再開容認発言を待ちかねたように、本日ついに、米軍は事故同型機の飛行再開に踏み切った。

我々は、事故直後以来、もちろん、１０月８・１２日にも、抗議し、要請しているように、事故原因の究明とはかかわらず、一切の普天間基地を利用する軍用機の飛行停止を訴えてきた。それは、９月１２日に市民集会に結集した３万人の市民・県民と共通の願いである。とくに、学問・研究・仕事の場としての大学は、静かで、安心・安全な環境が要請される。あの事故以来、扇風機の音に怯える学生、草刈機のモーター音に慄く職員などの例が伝えられるなど、事故機のみならず航空機の飛行だけでも正常でいられない人々がいることを分かってほしい。

米軍の公表した事故原因調査報告によると、ピン１本の有無が事故原因につながったという。そして、整備要員の疲労によるともいっている。ならば、今後も、基地がある限り、米軍機の飛行がある限り、今回にもましてさらに悲惨な事故がおこることが確実であるとおもわれる。しかも、そうした事故原因を容認した日本政府は、飛行停止の状態が長引くと「操縦士の勘が鈍るから」として、今回の飛行再開を認めたという。

我々は、このような事故原因の公表も、それを容認し県民の安心・安全より米軍を重視する日本政府の姿勢も、断じて許すことができない。

米軍はただちに、飛行再開を中断して、恒久的に飛行を停止し、普天間基地を閉鎖することを、５０００余人の学生、２００人以上の教職員の安心・安全な勉学・研究・職場を守る立場から、強く訴える。

2004.10.13

沖縄国際大学米軍ヘリ墜落事件対策本部